

2月5日 年間第5主日

ヨブ 7:1～7 Iコリ 9:16～23 マコ 1:29～39

1. マコ

v.38 「イエスは言われた。“近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。”」

先週と今週の福音書のテキストは、全体で24時間の中に起こった四つのお話を述べています。イエスがカファルナウムの会堂で「権威ある者としてお教えになった」(1:22)ことから始まって、それに伴う悪霊追放と病気のいやしが語られ、そしてイエスは福音の宣教のために“出て来た”のだという結論で終わっています。ルカ福音書の「わたしはそのために(父から)遣わされたのだ」(4:43)という表現は、おそらくルカによる解釈であつたらうと推測されます。

会堂での宣教の後すぐに、イエスはシモンの家でしゅうとめの病をいやし、彼女は一同をもてなします。夕方になって安息日が終わると、人々は病人や悪霊につかれた者たちをイエスのもとに連れて来て、いやしと悪霊追放が行われます。翌朝まだ暗いうちにイエスが人里離れたところへ出て行って祈っておられると、弟子たちが後を追って来て「みんなが捜しています」と言い、それに答えてイエスが上記の言葉を語られました。

“多くの病んでいる人や苦しんでいる人たちが来ている、絶好の活動のチャンスなのに……”という弟子たちの意見と、“福音を宣教することが第一の目的である”というイエスの主張とが、見事に対比されています。それは初代教会における“宣教の使命”への理解を、明確に反映していると言って良いでしょう。現代の教会でも同様の意見の対立が繰り返されていて、教会派と社会派というような色分けが行われたりしますが、これはかなり根本的な問題であって、教会の福音理解の根幹に関わる事柄です。

教皇ベネディクトは“「信仰年」開催の告示”の中で、“キリスト者はしばしば自らの社会活動が信仰を前提にしていると考えるが、実際にはこの前提は当然のものではなく、むしろしばしば公然と否定されている”と、鋭く指摘しました。そして世界中の司教に向かって、“主が与えてくださったこの霊的恵みの時に、信仰という尊い賜物を私と共に思い起こしてください”と呼びかけておられます。

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(1:15)は、その昔の思い出の言葉ではなくて、初代教会にとっての教会理解、信仰理解を導く、“復活のキリストによる宣教命令”そのものでありました(16:15、使 10:42-43)。現代の教会も、確かにこの同じ宣教命令を、ミサの朗読配分を通して天上のキリストから聞いているのです。

2. Iコリ

w.16-17 「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。自分からそうしているなら、報酬を得るでしょう。しかし、強いられてするなら、それは、ゆだねられている務めなのです。」

これは、使徒たちやその後継者である代々の司教、それに従属する司祭たちだけのことだと、多くの人が考えて来ました。中世に始まる“聖職位階にある者とは教養ある人、平信徒とは教養なき人々”という考え方が、ルネッサンス以降の平信徒の台頭によって突き崩されて来たにもかかわらず、それでも今なお多くの無自覚な人々の心を支配しています。その大きな原因の一つが、信者にせよ司祭にせよ、自ら聖書を学ぶことへの怠慢にあることは確かです。

教会憲章が、“…… 神の民について言われたすべてのことは、信徒、修道者、聖職者に平等に向けられている”(30)と述べているように、使徒パウロもここで自らの自慢話をしてではなくて、信徒一同の啓蒙のために語りました。ですから9:24の「あなたがた」も、9:25-26の「わたしたち」も、コリントの教会の信者一同を心に描いて言っているのです。

福音宣教は、信者の信仰による自発的な行為でありつつ、してもしなくても良いという意味で自由なのではなくて、ちょうど奴隷の務めのように主から委ねられたものなのです。しかしその前提は、先ず自らが“確かに福音にあずかっている”ということであって、そのことをうやむやにして“他人に宣教する”などということは出来はしません(9:27)。

3. ヨブ

v.6 「わたしの一生は機の梭よりも早く、望みもないままに過ぎ去る。」

“女は苦しんで子を産み、男は額に汗してパンを得る”と創世記が語っているように、私たちの人生には困難と苦勞と病や災いが満ちています。それらへの対処は当然必要なものであり、例えば今日の高福祉社会もその解決のために生まれました。

ヨブ記の結論を、あなたはお存じですか。

「ヨブは主に答えて言った。わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましょう。わたしはこの口に手を置きます。ひと言語りましたが、もう主張いたしません。ふた言申しましたが、もう繰り返しません。」(40:3-5)

福音を聞いた人だけがこのように語り、また私たちキリスト者は、人々が「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」(ロマ7:25)と言うようになるために、福音を宣教するのです。教会の福音宣教は、地上に理想の世界を作り出す人間の企画のようなもの(Peace and Happiness through Prosperity)ではないのです。

「見よ、わたしはすぐに来る。」(黙22:7,12) 「主はもうすぐ来られます。」(フィリ4:5/フランシスコ会訳)
「アーメン、主イエスよ、来てください。」(黙22:20) ハレルヤ。

2月12日 年間第6主日

創 3:16～19 Iコリ 10:31～11:1 マコ 1:40～45

1. マコ

v.45 「それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のない所におられた。」

重い皮膚病を患っている人がいやされ、彼の人生の最大の問題が見事に解決したのであるから、もはやイエスは用済みになってしまったという場面を、私たちはここに一瞬見る思いがします。

私たちはしばしば目先の困難の解決を神に求めますが、キリストによる罪の赦しと永遠の命を「得るために、目標を目指してひたすら走る」(フィリ3:14)などということには極めて冷淡であります。神のことはよりも、当座の生活のためのパンのほうが大切なのです(マタ4:4 参照)。

「悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされた」(使 10:38)イエスは、「死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた」(ロマ1:4)メシア(キリスト)であり(使 2:36)、「この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる」(使 10:43)と、使徒たちは宣教しました。福音書はこの使徒たちの宣教をその後の時代に伝えるために書かれた、初代教会の偉大な遺産であります。

イエスはなぜ「だれにも、話さないように気をつけなさい」(v.44) と厳しく注意されたのでしょうか。この問題については前世紀に、ヴレーデの有名な学説(Messiasgeheimnis メシア秘密)があって、それがイエス自身にさかのぼることが出来るのか、それとも福音書記者による創作なのかという論争が行われて来ました。しかし私たち信者は基本的に、すでに正典として教会に受け継がれて来た聖書を“あるがままに読む”ことによって、そこからキリストの福音を聞き取る姿勢を堅持したいと思います。イエスは「権威ある者としてお教えになる」(1:22)「神の聖者」(1:24)として「神から遣わされた方」(使 2:22)、すなわちメシアとして「宣教し、悪霊を追い出された」(1:39)のです。このキリストによる“悪魔と罪と死への勝利の福音”(Iヨハ3:8、ヘブ2:14-15、Iコリ15:54-57)を学ぶことをせずに、ただ目先の困難の解決だけに目を奪われてはいけないという警告を、現代の教会も聞かされているのです。

2. Iコリ

v.31 「何をやるにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」

この“聖書の学び”をプリントするために私が用意した表紙には、Οικοδομῆω(キリストの体を造り上げてゆき)という題字を掲げています。聖書ではこの言葉が“わたしたち”(10:23)や“あなたがた”(14:26)と結びつけて使われていますが、それらはすべて“教会を造り上げる”(14:12)という意味で理解されねばなりません。私たちはこれまで、そのような意味で「神の栄光を現す」という言葉を使って来たかどうかと、反省しましょう。

教会を造り上げることに、罪の赦しと永遠の命にもほとんど関係なしに、…… それらには全く無知な

ままで……、多くの善意による奉仕や活動が行われ、その結果として本当の救いや正しい信仰について「人を惑わす原因に」(v.32)になってしまってきた、そんな反面教師の数々を私たちは見ているのではないのでしょうか。

v.1 「わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい。」

あなたは使徒パウロがどのように福音を説明し、どのように信仰を語っているかを、学んでいるでしょうか？ 神の啓示に関する教義憲章(25)も、聖ヒエロニムスの「実際、聖書を知らないことは、キリストを知らないことである」という言葉を引用して、信者が聖書を学ぶことの重要性を強調しています。

3. 創

アダムと、このときはまだ命名される前の女(エバ)に、神は人生の労苦と死への定めを判決されました。これを原初の人類の祖先による罪の物語りとして… 原罪とはそういう意味です… 読むだけであるなら、それは福音でも神のことばでもありません。ずっと以前に、私の先輩に当たる一人の牧師が旧約聖書への感想を述べて、“どうやってもそこから神のことば(説教)を引き出せないテキストがある” と言うのを聞いたことがあります。しかし、それは何かが間違っているのです。

聖書は“罪と死の現実”と“キリストによる救いの確かさ”を、どちらも生々しく、そして力強く語っているのです。「つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。」(Iコリ15:22)

私たちはこの世を覆う数々の悲惨や困難という現実を、未来のバラ色のベールという虚飾で包む必要はないのです。すべての人にやがて必ず訪れる病と老化と死を、それが恐ろしくないものででもあるかのようには飾って、誤魔化す必要はないのです。

「罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主イエス・キリストによる永遠の命なのです。」(ロマ6:23) アーメン、ハレルヤ。

2月19日 年間第7主日

イザ 43:18～25 IIコリ 1:18～22 マコ 2:1～12

1. マコ

v.2 「イエスが御言葉を語っておられると、……」

福音書におけるイエスの奇跡物語りがいつも、御言葉を語る(= 宣教する/1:39)ことと一つであるという事実を見落としてはなりません。昔も今も、多くの人々が“罪の赦しの福音”には無関心で、ただ“癒やし”だけは求めるという傾向があって、実は初代教会の宣教もそのような環境の中で、そのような傾向に敢えて抗して行われていました。先日届いたばかりの「カトリック生活3月号」も、ちょうど“特集:癒し、癒される”となっています。どうか読者の皆様が、聖書から“罪の赦しの福音”を聞くことの大切さを、忘れることがありませんように。

今朝の福音書のテキストは、イエスによる奇跡物語りに vv.5b-10 の論争部分が後から挿入されて、現在の形で伝えられているものです。v.5の“信仰”は、イエスの語る御言葉を聞いているみんな(その人たち)の信仰のことであって、もちろんその中に中風の人自身の信仰も含まれています。神の御業は、信仰共同体である教会から切り離し得ないものなのです(6:5-6 参照)。そして、律法学者やファリサイ派の人々との論争を通じて、“御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたキリスト”(ヘブ9:12)が徐々に浮き彫りにされて行きます(1:1-3:6)。

イエスの“いやし”は“罪の赦し”の結果であることを、vv.9-11は語っています。そしてイエス・キリストは“神の子・救い主”(ΙΧΘΥΣ)であるという初代教会の信仰宣言が、v.7によって説明されているのです。

カトリック教会では伝統的に、“神の母おとめマリアをはじめ、使徒と殉教者、すべての聖人の取り次ぎ”を求めて祈るのが常でした(第三奉献文 参照)。彼らが私たちと共に“聖徒の交わり”の中にあることを、教会は感謝の中に覚えるのです。しかし、罪の赦しは“神であるキリストから来る”という一事を、私たちは決して忘れてはなりません(教会憲章 62 参照)。

2. IIコリ

vv.19-20 「この方においては“然り”だけが実現したのです。神の約束は、ことごとくこの方において“然り”となったからです。」

キリストがその十字架の死と復活を通して実現されたのは、「神の約束」であって(ロマ1:2)、それとは無関係に単なる“癒やし”を提供するためではありませんでした。

多くの方は、“困ったときに助けてくれる好都合な神様”を探し求めています。“罪の赦しの福音”には無関心で、ただ“癒やし”だけは求める…という傾向は、いつの時代にも優勢なのです。そして、しばしば司祭の説教でも、信者の祈り(共同祈願)でも、この傾向が強く見られるのが実情なのです。

現在プロテスタントのある教団の議長をしている某牧師が、最近次のような話を紹介しています。

|| ある地方の教会の牧師が、“社会問題に取り組み地域社会で発言力を持つ牧師が増えている、
|| しかし、御言葉を語ることにどれだけ熱心であるかということについては疑問が残る”と話して
|| いた。

神の約束の実現である“秘められた計画”が、イエス・キリストにおいて“然り”(vαί)となりました。歴史の教会がしばしば罪深く不信仰であるとしても、それでもこの“然り”(vαί)の宝を土の器に納めるように持っている、「この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために」(4:7)ということ、感謝しましょう。

v.22 「神はまた、わたしたちに証印を押して、保証としてわたしたちの心に“霊”を与えてくださいました。」

3. イザ

「わたしは主、あなたの神」(43:3)「わたしのほかに救い主はいない」(43:11)という前置きを前提にして、今朝のテキストの朗読は聞かれねばなりません。

v.19 「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。あなたたちはそれを悟らないのか。」

v.21 「わたしはこの民をわたしのために造った。彼らはわたしの栄誉を語らねばならない。」

v.25 「わたし、このわたしは、わたし自身のために、あなたの背きの罪をぬぐい、あなたの罪を思い出さないことにする。」

熱心な祈りの力でも、善き業によってでもなくて、ただ主がそう望まれて(マコ1:40/フランシスコ会訳)、“罪の赦し”が教会に与えられました。私たちはそれを感謝と信仰をもって無償で受けるのです(ロマ3:23)。「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と小羊とのものである。」(黙7:10)

「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ4:25) 今週の水曜日から、教会は四旬節に入ります。

アーメン、ハレルヤ。

2月26日 四旬節第1主日

創 9:8～15 1ペト 3:18～22 マコ 1:12～15

1. マコ

v.13 「イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。」

“主の僕なるメシア”として歩み始められた(1:11)イエスの公生涯は、最後の十字架上の死に至るまで一貫して、「サタンからの誘惑」の中の歩みでありました。マタイとルカに詳しく述べられている荒れ野の誘惑は、そのときだけの、もう終わってしまった昔の話ではありませんでした。「キリストは肉において現れ、“霊”において義とされ、天使たちに見られ、異邦人の間で宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光の中に上げられた。」(1テモ 3:16) このキリストの福音を、私たちは今年も四旬節の典礼を通して学んで行きます。決してガリラヤにおける善き教師イエスの、牧歌風の古い思い出話を聖書を通して偲ぶことではありません。「死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるため」(ヘブ 2:14-15)であったキリストの公生涯の物語りから、教会はこの期節に“神の国の福音”を聞いて“悔い改める”ようにと導かれます。

2. 創

v.11 「二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」

w.14-15 「雲の中に虹が現れると、わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。」

これは創世記に登場する最初の契約の物語りです。それは「地上のすべての生き物、すべての肉なるものとの間に立てられた永遠の契約」(9:16)であって、この世界がいかに罪に満ちて混乱しているとしても、それでもなお、神からその存在を許容されているのだということを語っています(8:21-22 参照)。宇宙ロケットに乗って旅立ち、一回りして地球に帰ってみたら、それが猿の惑星になっていたというような可能性を、本気で心配する必要はないということです。

大切なことは、そのような世界のただ中で、神の国の相続人である(ロマ 8:17)新しいイスラエル(ガラ 6:16)を贖い取る神の御業が、御子イエス・キリストの十字架と復活を通して実現した(使 20:28)ということです。教会はこの“秘められた計画”を“十字架の福音”によって学びます(1コリ 2:1-2)。

この世の人々は、地球が滅びないように、人類が滅びないようにと、本気で心配しています。しかし、私たち教会の関心事はただ一つ、「罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのち」なのです。「二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。」(マタ 10:29) すべての民が裁かれる終わりの日に、「さあ、わたしの父に祝福された人た

ち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい」(マタ 25:34)とだけ言っていただけのことこそが、私たちにとっては本当に重要なのです。

3. I ペト

v.21 「この水で前もって表された洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです。」

イエス・キリストの死者の中からの復活は、使徒的教会にとってその存立のまさに源泉であって(エフェ 1:19-23、フィリ 2:10-11)、私たちの教会はこの終末的な希望によって立っているのです。

カトリック教会では成人の洗礼のために、“入門式”に始まる求道期と“洗礼志願式”から始まる洗礼準備期が定められていて、入信の過程における教育の諸段階が用意されています。また幼児洗礼によって初めから教会に受け入れられた人々のためにも、その後年令に応じて“洗礼後の求道期”が必須であり、そのために“カテケージス”が行われます(カトリック教会のカテキズム 1231)。しかし、そこで問題なのは、そのような教育を行う司祭、修道者、また信徒の奉仕者たちが、教会が使徒継承によって受け継いで来た福音を、また洗礼の意味を、自らよく理解し、正しく教えて来ただろうかということです。

「(私たちは)洗礼によって、キリストと共に葬られ、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです。」(コロ 2:12) 四旬節には、すでに信者である人々にも洗礼の恵みをもう一度初心に帰って学び直し、これまでの不信仰と無知を悔いる“償いのわざ”が求められています(典礼暦年の一般原則 27)。過越の祭儀に備える私たち一同を、“主よ、あわれみたまえ。キリストよ、あわれみたまえ。” アーメン。